

聖マタイによる福音書第6章24～34節
 於：聖パウロ教会 司祭 山口千寿

立教小学校の元校長先生だった伊藤高清さんが書いた『ウィリアムズ物語』という小学生向けの本があります。言うまでもなく、日本聖公会の初代主教であり、立教学院の創立者であるウィリアムズ主教の伝記を記したものです。立教小学校の生徒たちに、自分たちが学んでいる学校の創立者はどのような人物であるか、また、建学の精神や教育目標はどのようなものであるかを分かって欲しいと願って、この本は書かれたようです。つまり、何故、この学校は建てられたのか、そこで何を学び取って欲しいのか、そのことを百万言費やして語るよりも、ウィリアムズ主教の人となりを紹介することで、端的に、そして核心に触れて児童に伝えることができると思われたのでしょう。もっとも、ウィリアムズ主教さんにとってみれば、ご承知の通り「道を伝えて己を伝えず」がモットーですから、伝記などを出版するということは意に反することであると、お墓の中で当惑しておられるかもしれません。

しかし、著者が言っているように、「旺盛な開拓精神、たゆまざる真理への追求心、そして自分の業績を少しも自慢しない謙遜な態度は、今の社会に最も欠けていることであり、子どもたちに見習ってもらいたいこと」であることに違いはないと思います。これは教会の言葉で言い換えれば、伝道心に熱く燃え、祈りを絶えず欠かさることなく、そして神さまに栄光を帰すという生き方を、ウィリアムズ主教は、生涯、貫いたということでしょう。そしてそのような生き方が、今の教会の中のどこに見られるのだろうかと問いかけられているように思えます。ウィリアムズ主教の信仰に基づいた生き方に、わたしたちも倣わなければならないと思います。

パウロは、諸教会に宛てた手紙の中で、しばしば「わたしに倣うものになりなさい」と勧めています（Ⅰコリント11:1、フィリピ3:17）、それはパウロ自身がキリストに倣うものであったからです。イエスさまの生き方を自分の生き方としたからこそ、「わたしに倣うものになりなさい」と言うことができたのです。わたしたちは、パウロの生き方を聖書を通して知り、学ぶことができますが、それを知識として知ってい

るだけでは、信仰が身に付いたものとはなっていないと言わざるを得ません。パウロをお手本として、己を捧げて同じ生き方に生きた時に、初めて信仰の喜びを自分のものとする歩みが始まるのです。

ウィリアムズ主教も、福音を説くだけではなくて、ご自身そのように生きたのでした。「道を伝える」というのは、言葉で説明するというよりも、むしろ日常生活に於いて福音を実際に生きてみせたということであったと思います。

立教学校に在学中にウィリアムズ主教から洗礼を受け、後に真光教会の牧師となって、労働者の間に福音を伝道した杉浦義道という方がおられます。その方は、ウィリアムズ主教は、「話はあまりお上手ではなかった。口よりも手が先に立ち手まねで話をする方で、監督(主教のことを戦前は「監督」と呼んだ)の説教等も白状しますが初めより終わりまでわたしは聞いたことがほとんどない。しかし、監督の燃ゆるが如き精神と信仰は十分に感得できた」と東京教区の修養会で語ったと言われます。

1887年(明治20年)には、旧約聖書の日本語訳が完成しましたが、その翻訳完成祝賀会が、プロテスタントの錚々たる牧師たちの出席のもとに開かれました。その席上、あるプロテスタントの老実業家が居並ぶ牧師たちを見回して、その中でウィリアムズ主教の姿が異彩を放っていたことから、「アー、群雀中の白鶴だ、偉い品性だ、あの品性があれば口は開かなくても語っている。基督教の説教はあの方ひとりですらっしゃる」と言ったと伝えられています。ウィリアムズ主教の存在そのものが、福音を証するものであったということでしょう(『チャニング・ムーア・ウィリアムズ』)。

今日の福音書にある、「自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな」というみ言葉も、ウィリアムズ主教は実際に生きてみせたと言いうことができると思います。伊藤高清さんの先の本は子供向けなので、その中にウィリアムズ主教のエピソードがいくつもちりばめられており、子供だけではなく大人にとっても興味深いのですが、その1つに次のようなものがあります。以前にお話ししたことがあるかもしれません。

ウィリアムズ主教は、大変、質素な生活をしておられたのですが、洋服もぼろぼろのものを着ていたそうです。ズボンは右と左で色の違うものを継ぎ合わせて、平気ではいていたとか。ある時、神戸から横浜までアメリカの船に乗って旅をした時に、昔なじみのアメリカ人の船長が、ウィリアムズ主教の洋服がいたるところがすり切れてボロボロになっているのを目にしました。ご本人はそのことを少しも気にかけていなかったのですが、余りの傷みように見かねて、「裏返しをしたらどうですか」と忠告をしました。すると、ウィリアムズ主教は、笑いながら「一旦、裏返しをしたのだけれども、それもひどくなったので、また、裏返しをして着ています」と答えたということです。

それ程儉約して給料を貯めたのです。貯めたお金をどうしたのか。礼拝堂を建てるために捧げたのです。そしてまた、日本の生活に困窮している人たちのために、惜しみなく使ったのです。

築地の聖三一教会の建築には、10数年分の収入をすべて捧げました。ウィリアムズ主教一人の出資によって、この教会は建てられたのです。今、明治村に移築されている京都の聖ヨハネ教会も同様です。京都聖ヨハネ教会の献堂式には、ウィリアムズ主教は、同じ時刻に重い病気の人を訪ねに出かけ、出席しませんでした。そして、聖別式を司式したマキム主教に手紙を送って、「自分のことについては一言も触れないように」と頼んだのでした(『道を伝えて己を伝えず』)。

また、ウィリアムズ主教は上流階級の貴人の招待には一切、応じなかったということです。わたしのような俗物は、仮にそんなことがあったとしたら、何か名誉なことでもあるかのように、いそいそとして出かけて行くのですが、ウィリアムズ主教は全てお断りになりました。その理由は、着物が無いからということでした。

当時の外務大臣の井上馨という人は、ウィリアムズ主教を指して、「あの人は聖人です」と常に評していたと言います。日本のカトリック教会では、今、キリシタン大名の高山右近を聖人の前の段階である福者に列福してもらうよう、教皇庁に申請する運動を始めていますが、日本聖公会に聖人を列聖する制度があったなら、ご

本人には迷惑な話でしょうが、ウィリアムズ主教は真っ先に聖人に挙げられること
でしょう。

ただ単に、質素な生活に甘んじて儉約してお金を貯めて、それで日本の教会を
造ったり貧しい人たちを援助したりしたということではなかったと思います。金策の
ための方便としてぎりぎりの生活を送ることを選んだわけではなかったでしょう。そ
うではなくて、この世の思い煩いに心を奪われることがなかったのではないでしょ
うか。それは神さまへの心底からの信頼があったからこそだと思います。

イエスさまは、「空の鳥をよく見なさい。野の花がどのようにして育つのか、注意し
て見なさい」と教えておられます。よく見なさい、注意して見なさいということは、空
の鳥や野の花から学び取りなさいということです。何を学ぶのでしょうか。鳥や花
は自ら働くことをしないのに、天の父なる神さまは養い、装ってくださるではな
いか。ましてや鳥や花よりもずっと大切な存在と認めてくださっているわたしたち一
人一人に、神さまの眼差しが注がれていないはずがないではないかと、イエスさま
は天の父なる神さまの御心を示してくださるのです。

わたしたち人間は衣食住のことに心を奪われます。「衣食足りて礼節を知る」とい
う言葉がありますが、逆に言えば、衣食住に事欠くと恥も外聞もかなぐり捨てて、己
の必要を満たすために狂奔するということでしょう。そのためには、他人を蹴落とす
ことも平気でするようになるのです。それほど、自分の足下を見ることから、わたし
たちは逃れられないのです。空の鳥や野の花が目に入らなくなるのです。

衣食住が足りて余裕ができたなら、信仰のことを考えてみましょう。神さまのことを
思いめぐらしてみましようというのであれば、それは異邦人と同じだ、神さまのこと
を知らないで生きている人間と変わらないではないかと、イエスさまは指摘される
のです。

空の鳥をよく見なさい、野の花を注意して見なさいというイエスさまの御言葉は、
わたしたちに目を足下ばかりに向けるのではなくて、天に向けて生きなさいという
勧めです。何故なら、「命は食べ物より大切であり、体は衣服より大切」だからで

す。わたしたちは地上の生活を送るために必要なものに、不必要なまでに捕らわれてはいないでしょうか。

ウィリアムズ主教に倣い、師父が信頼したお方にわたしたちも信頼を寄せて、目を天に向けて日々の生活を送って参りたいと思います。